

# 神楽の里で 【中学年4 - (5)】

## - 「地域」と結びつけて、価値に迫る取組み -

(1) 主題名 郷土を大切にする心 [4 - (5)] 関連項目 [4 - (6)]

(2) ねらい 地域の行事や活動に興味を持ち、積極的にかかわろうとする態度を育てる。

(3) 資料名 「神楽の里で」

(4) 授業の展開例

	学習活動	主な発問と児童の心の動き	留意点
導入	1 郷土のいいところについて話し合う。	この町にはどんないいところがありますか。 ・自然が豊か。 ・神楽や祭などいろいろな行事がある。	社会科や総合的な学習の時間の内容を想起させる。
展開	2 資料を読み、話し合う。	けんたは、神楽の鬼の役に決まったときどんな気持ちでいましたか。 ・うれしくてたまらない。 ・上手になろう。・うまくできるかな。 ・しっかり練習しよう。  おこられてばかりのけんたはどんな気持ちでいるでしょう。 ・練習がたいへん。 ・しかられるからつらい。 ・ちゃんとやっているのに、そんなに言わないで。  団長さんの話を聞きながら、けんたはどんなことを考えていたでしょう。 ・ぼくたちのことをそんなに思っててくれたのか。 ・これまで以上にがんばろう。 ・「神楽」が若い者と年寄りを一つにすることができるなんてすごい。	けんたの気持ちに視点を当てて考えていく。 神楽を表面的な部分だけでとらえていることに気付かせる。  けんたの気持ちに共感させる。  けんたの気持ちが変わった理由を団長さんの言葉から考え、深めていくことで、価値に気付かせたい。
開拓	3 地域の行事に参加したときの気持ちを振り返る。	地域のどんな行事や祭りに参加したことがありますか。 ・花田植え にぎやかで楽しい。 ・どんど祭り 一年の健康を願っている。	地域の思いまで踏み込みながら価値の一般化を図る。
終末	4 教師の話を聞く。	・神楽の他にも地域に伝わることがたくさんあるなあ。 ・ぼくもやってみようかなあ。 ・地域の人の思いがこめられているのだなあ。	現在、子どもたちと接点を持ちながら活動されている方の思いを伝えたい。

# かぐら 神樂の里で

チャンチキ  
神樂の樂をうけも  
つ樂器の一つ。

「トントンチッチ、トントンチッチ」  
たいこ、チャンチキ、ふえのにぎやかな音に合させて、神樂を  
まいます。けんたは、今、神樂のれんしゅうのまつさい中です。  
けんたの町では、神樂がさかんです。けんたも子ども神樂団  
に入っています。けんたは、今年、やりたくてしかたがなかつ  
た鬼の役をすることになりました。けんたは、はりきつて、れ  
んしゅうを続けていました。

「つぜん、楽が止まりました。

「何回言つたらわかるんじやあ。しゃきっとせんかい。」

神樂団の団長さんのきびしげ声です。けんたは、ドキッとした

「けんた、そんなんじやあ、今度の発表に間にあわんぞ。むつ  
と大きくおど。」

練習がはじまつたころ、けんたは、鬼の役が楽しみで楽しみでしかたありませんでした。  
しかし、重い鬼のいしきうをつけてまつのは、思つていたよりずつとたいへんです。動き  
にくく、すぐにあせがふきだしてきます。それなのに、何回も同じことをくり返すばかり  
だし、大きな声でしかられるのです。けんたは、れんしゅうがだんだんしんどくなつてき  
ていました。それにれんしゅうで夜おそくまで起きているので、朝起きるのがつらいので  
す。

「神樂のれんしゅうたいへんだなあ。休もうかな。」

けんたは、そんなことを考え、すつきりしないまま、毎日をすゝっていました。

そんなある日、学校で、「まちたんけん」に出かけました。神樂団の人には話を聞きに行  
くのです。神樂団では、団長さんの話を聞きました。

「古い歴史がある神樂じやがのう、戦争がおわったころは、まつ者がおらんで、神樂がで  
きんようになりかけたんじや。でものう、この町に神樂がなくなつたらさびしい思うて  
のう、仕事がすんでから集まつて、せりぎりのところで何とか続けてきたんじや。その  
うちに、町も神樂を見直してくれるようになつて、若い者もこの町に残つて、神樂を続  
けてくれるようになつたんじや。」

団長さんの話は続きます。

「この年になるまで、わしが神樂を続けてこられたのは、若い者や子どもらのおかげなん  
じや。それぞれの成長を見るのが楽しみでのう。それに、若い者といつしょに神樂をし  
ょうたら、年をひろわんのじやないか思つてのう。神樂は、若い者と年よりを一つにさ  
せてくれるものなんで。」

けんたは、団長さんの話に引き込まれていました。そして、その夜、これまで以上にあ  
せをかきながらも、目をかがやかせてれんしゅうに取り組むけんたのすがたがありました。



# 活用に生かすための実践報告

「神楽の里で」

## 1 主題の設定

中学年になると子どもたちの行動範囲は広がりをみせる。特に地域での生活が活発になるのに伴い、これまで以上に地域の行事や活動に興味を持つようになってくる。したがって、この時期に、地域の人々の生活、文化、伝統に親しむことを通して、自分のふるさとを愛する心情を育てる必要がある。

本資料では、「神楽」にこめられた人々の願いを感じとり、これを受け継ごうとする主人公の姿を中心に描いた。主人公の気持ちにそって考えることで、子どもたちが自分の住む郷土に関心を持ち、その一員として生活できるようにしたい。

## 2 指導過程の工夫

社会科や総合的な学習の時間での自分たちの住む郷土の生活や文化、伝統行事などについて調べる学習を生かして、授業との関連をはかるようにした。

地域で行事や祭りが行われているとき、意図的に話題にし、子どもたちの意識を高めたい。

自分たちが住む郷土に伝わる行事等の写真やビデオなどを用いて、郷土の様子や行事が具体的にイメージできるようにしたい。

## 3 発問の工夫

主人公の気持ちにそって発問を展開した。中心発問では、「団長さんの言葉を聞きな

がらどんなことを考えていたか。」と聞くことで、子どもたちの多様な考えをひきだすことをねらった。

## 4 児童の反応（授業後の感想）

- ・ 神楽団の人の気持ちを初めて聞いて、ぼくたちのことをよく考えてしてくれるのだなあと思った。
- ・ 地域にあるたくさんの行事や祭りには、みんな地域の人の思いがあるのだなあ。
- ・ （子ども神楽に入っている子どもが）今度の練習で、気持ちを聞いてみたいなあ。
- ・ （子ども神楽に入っている子どもが）しっかり練習をしないといけないと思った。

## 5 実践者からの一言

実践した地域は、結びつきも強く、子どもたちは、小さい頃から自然に地域の行事や祭りに参加しており、いろいろな地域の行事や祭りが「当たり前」のことになっている。その中で、さらにもう一步踏み込んで、それらの意義に気付かせようと考え実践した。

心のノートP84～85の「わたしのふるさとを心に残そう」を利用することも考えられる。

可能であれば、地域の方を招いて、地域に対する気持ちを直接話していただけると効果があると考える。

（美土里小学校 二井岡直文）